ほぼ週刊コラム　Partnership論　その１２１

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』の振り返りと準備**

**第五回勉強会（**[**年表**](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2014/20141003%20W113%20economic%20substance%20without%20profit/shiryou/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev8.ppt)**項目２：経済的実体（economic substance））の準備（５）：**

**19世紀末、経済がモンスター化するのに抗（あらが）った人々（その２）**

**マックス・ウェーバー**

**～～「合理的なる」資本主義的経営とは、その収益性のコントロールを近代的なる簿記という手段や貸借対照表の作製やによって計数的におこなうところの営利経営をいう。～～**

　2014.11.28　rev.1　齋藤旬

　**誤解なきよう願う。この「合理的なる･･･」の文章は、決して近代資本主義を褒めたものではない。全く逆。凶兆の警告だ**。ウェーバー（1864-1920）が19世紀末に、これから20世紀にかけて経済モンスター化が進行することを予想し、その元凶は発生主義会計だ[[1]](#footnote-1)、と警告した文章だ。この文章は、ウェーバーの死の前年1919年に発刊された講義録に出てくる。日本での和訳は、黒正・青山の訳『一般社会経済史要論』岩波書店 昭和30年発行で、その下巻119頁に出てくる文章だ。昭和30年と言えば終戦後10年経った頃。社会経済が「社會經濟」と表された時代。経済モンスター化が進んで半世紀経った頃、一部の日本人達は、この経済が必ずしも西洋人が望んだものではないことを知る。それはさておき…。

　[コラム１１９](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2014/20141114%20W119%20the%20true%20nature%20of%20economy/20141114%20W119%20the%20true%20nature%20of%20economy%20rev1.docx)で示した様に、発生主義会計とは「年度（一定期間）ごとの会計」「すべてお金に換算」「規則的減価償却」の三点を特徴とするものだ。ウェーバーの時代には未だここまで確立していなかった。しかしこれが資本（Capital）や上場株式会社（Listed Corporate）などの仕組みを生み出し、結局は、経済をモンスター化していくとウェーバーは予想した。

　**先週は、経済モンスター化の原因を、「思想」面から探り**、「corporate bodyの本質[[2]](#footnote-2)を、State（国家）がChurch（教会）から略奪したのが元凶」と考えたローマ法王レオ十三世を紹介した。

今週は、経済モンスター化の原因をもう少し「制度」寄りから探る。現在の用語を使って言うと、「ガジガジに規則的・計数的な発生主義会計が発明され、この発生主義会計が強制されるcorporate会社形態が発明されるのが、元凶」と警告したウェーバーを紹介する。

**今週の「言いたいこと」を先に短く述べる**。読者には脚注2を参照しつつ考察して頂きたいが、19世紀末、ローマ法王レオ十三世が言いたかったところの「corporate bodyの本質」が、国家によって教会から略奪された後に、規則的・計数的な発生主義会計によって狭められ、「お金」「利益」「GDP」といった狭小なものに変容していった。レオ十三世とウェーバーの見解をつなぐと、これが、経済モンスター化の原因、というか経緯なのだろう。

**暴走していく経済をモンスターでなく「鉄の檻（おり）」と、ウェーバーは言い表した。**ウェーバー1904年初出論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』中山元訳 日経ＢＰ4791には四箇所、「鉄の檻」ないし「檻」の表現が出てくる。それを以下に転記しておく。これらウェーバーの言葉から、21世紀に生き、最早corporate経済を「当たり前」としているであろう読者の皆さんにも、改めてその「モンスターぶり」を感じて頂きたい。

**「鉄の檻」1：『プロ倫』中山元訳58-59頁「職業の義務の思想」**

職業の義務という独特な思想は、今日ではごくなじみのものであるが、実際にはそれほど自明なものではない。これは、各人は職業を自分の義務と感じるべきであり、実際に感じていることを示す観念である。その「職業」的な内容がどのようなものであるかにはかかわらないし、また各人がその職業において自分の労働力あるいは自分の財産を（「資本」として)有効に利用しているにすぎないと感じているかどうかにも、かかわらないのである。この思想は資本主義の文化の「社会倫理」に特徴的なものであって、ある意味ではこうした社会倫理を構築する役割をはたしているのである。

この思想は、資本主義だけを土台として成長してきたものではない。そのことはいずれ過去の歴史にさかのぼって考察するつもりである。またもちろん、現在の資本主義が存続するためには、近代的な資本主義的な事業の経営者や労働者など、その個別の担い手がこの思想を倫理的な原則として主体的に獲得していなければならないというものでもない。

現代の資本主義的な経済秩序は巨大な宇宙（コスモス）であって、各人は生まれるとともにこの宇宙のうちに入るのである。 すべての人は少なくとも個人としては、この改造することのできぬ〈檻〉のうちに住むことを、事実として強いられているのである。

個人が市場と結びつきを維持するかぎりは、その経済的な活動にこの宇宙が規範を押しつける。製造業者が長いあいだこの規範に反して行動するならば、経済的に排除されるのは間違いのないことである。また労働者たちも、この規範に適応できないか、適応しようとしない場合には、失業者として路頭に迷うことになるだろう。

**「鉄の檻」2,3,4：『プロ倫』中山元訳490-494頁「鋼鉄の〈檻〉」**

近代の資本主義の精神を構成する本質的な要素の一つ、そして単にそれだけでなく近代の文化そのものを構成する本質的な要素の一つは、天職という観念を土台とした合理的な生活態度であるが（この論文ではこれを証明しようとしてきたのである）、この態度はキリスト教的な禁欲から生まれたものだ。ここで、この論文の冒頭で引用したフランクリンの文章を読み返していただきたい。そうすれば、そこで「資本主義の精神」の本質的な要素として要約した心構えが、私達がこれまでピューリタンの職業的な禁欲の内容として語ってきたものと同じものであり、単にフランクリンの場合には宗教的な基礎づけが消滅しているに過ぎないことがご理解いただけるだろう。

近代の職業労働には、禁欲的な性格が刻印されているという考えは、別に新しいものではない。ファウストが願ったような完全な人間性を享受することは放棄して、専門の仕事に専念することは、現代の世界において何らかの価値のあることを実現するための条件となっているのである。だから何らかの「業績」をあげるために何らかのことを「放棄」するのは、どうしても避けられないことなのだ。市民的な生活スタイルは、それが品のないものとならずに真の意味でのスタイルであろうとするならば、こうした禁欲的な基調をそなえたものとならざるをえないのである。それはゲーテがその人生知の高みから、『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』とファウストの生涯の終幕を描いた書物によって、私達に教えようとしたことでもある。ゲーテにとってはこの認識は、麗しき人間性が完全に開化する時代を待望することを断念し、それから訣別することを意味した。古代においてアテナイの全盛期がついに再現されなかったのと同じように、西洋文化の歴史の経過においても、そのような麗しき時代はもはや訪れることはないのである。

ピューリタンたちは職業人であろうと欲した。しかし私達は職業人でなければならないのである。かつては修道院の小さな房のうちで行われていた禁欲が、現世の職業生活のうちに持ち込まれ、世俗内的な倫理を支配するようになった。そしてこの禁欲は、自動的で機械的な生産を可能にする技術的および経済的な条件と結びついて、近代的な経済秩序のあの強力な宇宙（コスモス）を構築するために貢献したのである。このコスモスは今や、直接に経済的な営利活動に携わる人々だけではなく、その機構のうちに生まれてくる全ての個人の生活のスタイルを、圧倒的な威力によって決定しているのである。そして化石燃料の最後の一塊が燃え尽きるまで、今後も決定しつづけるだろう。

パクスターは、外的な事物についての配慮は、「いつでも脱ぐことのできる薄い外套」のように、聖徒の肩に掛けられているべきだと考えていた。しかし運命はこの外套を、鋼鉄のよろいのように硬い〈檻〉にしてしまった。禁欲が世界を作り直し、世俗の内部で働きかけようとしているうちに、これまでの歴史においてかつて例がないほどに、世俗の外的な事物が人間にますます強い力を及ぼすようになり、ついに人間はこれから逃れることができなくなったのである。

現在では禁欲の精神は、この鋼鉄の〈檻〉から抜けだしてしまった（それが最終的なものかどうか、誰に分かるだろうか）。勝利を手にした資本主義は、かつては禁欲のもたらした機械的な土台の上に安らいでいたものだったが、今ではこの禁欲という支柱を必要としていない。禁欲の跡を継いだのは晴れやかな啓蒙だったが、啓蒙の薔薇色の雰囲気すら現在では薄れてしまったようである。そして「職業の義務」という思想が、かつての宗教的な信仰の内容の名残を示す幽霊として、私達の生活のあちこちをさまよっている。

「職業の遂行」が、もはや文化の最高の精神的な価値と結びつけて考えることができなくなっても、そしてある意味ではそれが個人の主観にとって経済的な強制としてしか感じられなくなっても、今日では誰もその意味を解釈する試みすら放棄してしまっている。 営利活動がもっとも自由に解放されている場所であるアメリカ合衆国においても、営利活動は宗教的な意味も倫理的な意味も奪われて、今では純粋な競争の情熱と結びつく傾向がある。ときにはスポーツの性格をおびていることも稀ではないのである。

将来、この鋼鉄の〈檻〉に住むのは誰なのかを知る人はいない。そしてこの巨大な発展が終わるときには、まったく新しい預言者たちが登場するのか、それとも昔ながらの思想と理想が力強く復活するのかを知る人もいない。あるいはそのどちらでもなく、不自然きわまりない尊大さで飾った機械化された化石のようなものになってしまうのだろうか。最後の場合であれば、この文化の発展における「末人」たちにとっては、次の言葉が真理となるだろう。「精神のない専門家、魂のない享楽的な人間。この無に等しい人は、自分が人間性のかつてない最高の段階に到達したのだと、自惚れるだろう」。

**ウェーバーは、敬虔なルター派教徒である母親からWestern Christianityを受け継ぎ、裕福な資本家であった父親からは資本主義を成り立たせる法律や政治を学んだ**。いわば、コラム[１１４](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2014/20141010%20W114%20why%20so%20much%20hate%20for%20temporal%20world/20141010%20W114%20why%20so%20much%20hate%20for%20temporal%20world%20rev1.docx)，[１１５](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2014/20141017%20W115%20conscription%20vs%20conscientious%20objection/20141017%20W115%20conscription%20vs%20conscientious%20objection%20rev3.docx)，[１１６](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2014/20141024%20W116%20dichotomy%20of%20norm/20141024%20W116%20dichotomy%20of%20norm%20rev1.docx)で紹介した*Duo Sunt*（両権）社会に生きるambivalentな精神構造を持った人間だった。しかもその相反する両種の精神を明確に強く持った人間だった。本コラム用語で例えて言うなら、悩み深き「個人」、即ち、国家の徴税権に従うべきか、自分達が持つ租税回避権を行使すべきか、国家が持つ徴兵権に従うべきか、自分達が持つ良心的兵役拒否権を行使すべきか、と言った具合にまじめに深く悩むタチだった。案の定、ウェーバーは半生を神経症に苦しめられたのだが…。

それはともかくとして、この様に*Duo Sunt* 精神構造を色濃くしかも精緻に持つウェーバーこそ、経済モンスター化の原因を「解明」 --- と言うか「正確に予告」かな、なぜなら、ウェーバーの時代（19世紀末）には未だcorporate経済が、「･･･化石化した燃料の最後の一片まで燃えつくし」「その巨大な発展が終わるとき･･･」[[3]](#footnote-3)は未だ迎えていなかったのだから --- 正確に「予告」するに最もふさわしい人間であり、実際にそうなった。

[年表](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2014/20141003%20W113%20economic%20substance%20without%20profit/shiryou/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev8.ppt)項目14には、現在のローマ教皇フランシスコが2013年の年末に発行した論文[*Evangelii Gaudium*](http://www.vatican.va/holy_father/francesco/apost_exhortations/documents/papa-francesco_esortazione-ap_20131124_evangelii-gaudium_en.html)を取り上げている。この論文の主張は、『「each human personの尊厳」と「共通善の追求」を経済原理の根本に据え直し、新たな経済(本来の経済)を探求しよう（取り戻そう）』という呼びかけだ。この最新のVatican論文にも、明らかにウェーバーの見解を参照していると思われる箇所が幾つも出てくる。それらはこの勉強会の最終回で話そう。

**20世紀初頭までは、大学に経済学部というのはなかった**。経済学は、アダム・スミス（1723-1790）が活躍した18世紀には「道徳哲学」として研究されていたのだし、ウェーバー（1864-1920）が活躍した19世紀末から20世紀初頭には「哲学」ないし「法学」として扱われた。

　世紀転換後、corporate経済ないし資本主義経済がモンスター化し「鋼鉄の檻」となるにつれ、合理的近代経済学が整備され、大学に「経済学部」が生まれていく。

　ここからは、[コラム１１３](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2014/20141003%20W113%20economic%20substance%20without%20profit/20141003%20W113%20economic%20substance%20without%20profit%20rev1.docx)のお復習いになるが、

1. 会社と言えばpartnershipしか知らない人々が、発生主義会計をmandatoryとするcorporateに、契約自由的な株買い・投資を無理矢理に持ち込んで「バブル」発生。
2. 1929年10月24日の暗黒の木曜日を迎え、バブル崩壊、世界大恐慌に突入。
3. 1941-1945　第二次世界大戦
4. 戦後、「冷戦」が始まる。経済主導原理は、東側の社会主義計画経済と西側のケインズ主義管理経済の二つに絞られた。東側も西側も、国家当局による規制が厳しく敷かれ、「契約自由」「会計自由」は事実上消滅。
5. 「冷戦終結」。1989年ベルリンの壁崩壊、1991年ソ連の崩壊。
6. 1991年、ヨハネ・パウロ二世が満を持して出版した論文、即ち、[年表](shiryou/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev8.ppt)項目９に示した『[*Centesimus Annus*](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/encyclicals/documents/hf_jp-ii_enc_01051991_centesimus-annus_en.html)』が、新たな社会像を鮮やかに描く。

　･･･と言う具合に進んでいく。

　恐らく今後、「経済学」は拡がって二つの領域をカバーするようになるのだろう。一つは、お分かりのように「合理的近代経済学」。そしてもう一つは、そう、ウェーバーが言う様に、「まったく新しい預言者たちが登場するのか、それとも昔ながらの思想と理想が力強く復活するのかを知る人もいない。」のだから、今は未だハッキリとは言えない。ただ…。

**もう一度繰り返そう。今週の「言いたいこと」。**

19世紀末、ローマ法王レオ十三世が言いたかったところの「corporate bodyの本質」あるいは米国partnership税制用語で言うとことの「経済的実体」が、国家によって教会から略奪された後に、規則的・計数的な発生主義会計によって狭められ、20世紀の百年をかけて、「お金」「利益」「GDP」といった狭小なものに変容していった。

今週は以上。来週も乞うご期待。

1. 発生主義会計が、Capital（資本）という概念の起源だとした学説は、「ゾンバルト･ウェーバー・テーゼ」（the Sombart-Weber thesis）と名付けられた。詳しくは、Sydney Pollard 1963年論文『Capital Accounting in the Industrial Revolution』参照方。大雑把には、岡田清の2002年論文[『公企業とアカウンタビリティー』](http://www.seijo.ac.jp/pdf/faeco/kenkyu/158/158-okada.pdf)を読むと把握できる。 [↑](#footnote-ref-1)
2. レオ十三世の言う「corporate bodyの本質」とはいったい何だろうか？　先週号で和訳したVatican1891年論文でも、その答えは明らかにされていない。ただ、齋藤の私見の域を未だ出ないが、「経済」とは本来広い意味を持つと考えるならば、「corporate bodyの本質とは何か？」という問題は、「経済的実体とは何か？」という問題と、本来はほぼ等価な問題だと思う。即ち19世紀末にcorporate company formが模索された当初は、まだ、非計数的な価値を含む「経済的実体」も担いうる組織としてcorporateは模索されていたのだろう。しかし、規則的・計数的な発生主義会計が明確化され、更にそれがcorporateに強制されるものだという認識が、合理的国家 --- ウェーバー『一般社会経済史要論』岩波書店 昭和30年発行の下巻215頁でいうところのDer rationale Staat --- によって一般化されるにつれ、corporateという形態をとる会社によって実現される「経済的実体」とは、とどのつまり「お金」であるということになっていったのだろう。即ち、本来は広い意味を持つはずの「経済的実体」が狭められ、「お金」「利益」「GDP」といったもので表されるものに、「corporate bodyの本質」も「経済的実体」も変容していったのだろう。 [↑](#footnote-ref-2)
3. ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳　岩波文庫白209-3の365-366頁　 [↑](#footnote-ref-3)